

こすもす保育園見学日記 その二

— 絵本をよむ —



竹田 都志子



一月二十九日

私は、保專の新米教師である。勉強のためある保育園を見学させていただいている。そして、今日からは、絵本の読み方を中心に勉強に伺うことにした。

園庭に入っていくと、ひとりの男の子が、嬉しそうに「ぼく、パン今日持ってきたの」と話しかけてきた。「そうお、いいわねえ、ママが入れてくれたの?」「ううん、おばあちゃん。ママ死んじゃったあ—」

ママがいない悲しみを、まだそんなに身にしみ感じていないのが、かえってかわいそうだった。

のぶみつ君が遊動ブランコからまっすぐ走ってきて、「おばあちゃん、まもる君が、まこと君のおなかけっちゃって、まこと君泣き出しちゃったあ」と救いを求めてきた。

でも、さっきから、何が原因か、まもる君をいじめていたみんな。

「どうしてまもる君も一緒に入れてあげなかったの?」「だってこれだけでも、これだけでもいたもの」と指を四本伸ばしてみせる。

「まこと君に『歩ける?』ってきいてごらん」と言うともどつて行つた。でも不安らしく誰か保育さんがいまいかと見回して、あきらめる。五分程して、帰ろうとする私に、のぶみつ君がどこからかかけてくる。「あのね、まもる君が、まこと君にあやまつたけど、まこと君まだ泣いている」「そうお、これ、誰か破いちゃった、きのう、先生が折ってくれたのに」「そうお、せっかく折ってくれたのにね」と答えると「せっかく」ということばがわかったらしくなすく。そして長方形に破られた色紙をパンパンと鳴らして遊ぶ。

いた、いた、三歳児組の明るい先生が。頭を下げると、向うからやってきてくれる。

「居残りさんの時、来て絵本を読んでやってもいいですか？」ときくと、嬉しそうに笑って「園長先生か、主任さんにきいて下さい。私ら、こんなもんで」と、手で低い位置を示す。

三・四歳児組の、のぶみつ君でさえ、しばらくして思い出した私の顔を、知恵遅れのA子ちゃんは、まっさきに寄ってきた。

「おはよう」と言うと、嬉しそうに、本のグラビアの切りぬきをポケットから出してみせた。それは食器のグラビアのページだった。「きれいねえ、いいわねえ」と言うと得意そうに何か言っただけでみせたりした。

でも、私の方で知恵遅れの……という先入観があって、寄ってきてくれたことを感激したり、何と答えようかと考えて、かえってスラスラと言葉が出なく、A子ちゃんは、手をつないでいた同じ組の女の子と行ってしまった。

二月十三日 夕方

残留保育児の絵本のことを主任さんと、園長先生に許可を受けらる。園長先生はニコニコと許して下さいさる。

夕方の園庭、雨が少ないこの頃、乾燥した泥で遊ぶ子どもたちは、ほこりだらけ。でも、これが子どもたちの姿だ。

三歳児組の仲良しになった保育さんに、絵本を読んでやるこ

とが許可になった喜び”を伝える。彼女は、「絵本を読んでやる」と言っても、むずかしいですよねえ。こう（横に）持って読んでやっていたのか、暗記して、こう（前に）持って、子どもたちの顔を見ながら読んでやらなきゃいけないのか？ 園では、下読みする時間ないし、家に帰れば夕食、風呂入れ、後片づけ、そしてちょっと自分の勉強を本を開くと主人はこんな顔（しぶい顔）するし、みんな同じよねえ」と、現場の嘆きを話してくれた。

残留保育児といっても、みんな元気で外で走りまわっている。チラチラと見ると、一番年長組で、女の子二人、男の子一人が折り紙などしているだけだった。

これじゃ五・六歳児用の絵本を持ってこなきゃ駄目だな、そして雨の日に三歳児や四歳児を……初めは絵本を横に持つも、前に持つもない、机の上に広げて、まわりを囲んで、二、三人にのぞかれて読む位だなあ……と思索した。

三月五日（水） くもり（夕刻雨）

今日は天気予報があたって、小雨が二時頃から降り始めた。会議も早めに終わった。今日は絵本を読んであげられるチャンスだ！と思ひ、私は上司に許可をもらい、期待と、初めて子どもたちを前に絵本を読む不安とで胸がいっぱいになり、まるで実習生のよ

うな気持で雨の道を園に向った。

保育園の門をくぐると、まだお帰りの最中だった。オルガンの音が聞えてくる。ひとり雨をよけて待っていると、お迎えに来たお母さんが寄ってきて、私を母親とまちがえて、いろいろ話しかけてきた。

お帰りはじきに終わった。ガラリと保育室の戸をあけて、三歳児クラスの私と仲良しになったのぶみつ君が顔を出した。

「あれ、きのうの先生が来ているよ。」「みなにご本読んでくれるんだってよ」とお母さんが言ってくださる。のぶみつ君は、私にスリッパを持って来、（ア、夢中になり、スリッパ忘れちゃった）かわいく私をせかせせた。「レインコートは、お部屋に入る時はぬがなきゃいけないのよ」と言って待たせながらぬぎ終ると、うけとり「かけてくる」と、せっせとコートかけに持っていったくれた。

サア、仲良しになった三歳児クラスの保育さんが、保育室の床に毛布をしいてくれた。その上に、子どもたち十人位が座った。

お母さんに、今日持参した二冊の絵本をみせた。三歳児からと裏表紙にかいてある「ゆかいなかえる」と、四歳児からという「シナの五にんきょうだい」である。

「三歳児組でも、もう三月、ほとんど全員が四歳になっている

とと思って」と言うと、お母さんは「ギリギリですわ」とおっしゃった。そして私の持っている二冊をみて、「あっ、こっちですわね」と「ゆかいなかえる」を指していわれた。また最初に「ぐりとぐら」ですか？　ときかれた。私もその題名はよくきくが読んだことはない。ぜひ読まなくちゃと思った。

サア、子どもたちを前に、私も毛布に腰をおろそうとしたら、お母さんがさっと椅子をくれ、「後の子が見えないでしょう」と言われた。聴きとれる隊形なんて、本を読んできながら……とまらず失敗。

初めお母さんの言われるとおり、「ゆかいなかえる」を読んだ。表紙をめくると、見開き一杯にかいたおたまじゃくしをみて、「ア、かえるの子よ」と叫ぶ。「そう、おたまじゃくしね」と言い、いつのまにか私はページをおいながら、棒読みでなく、合の手を入れ、「さあ、どこにかくれるかなあ」と、興味をひく言葉を入れざるを得なかった。

途中お迎えがきて、一人、二人、子どもたちが欠けていった。しかし「あ、あそこにかくれている」という風に何とか反応はあった。

ただ、あんなになついで迎えてくれたのぶみつ君が、机にのぼって、「ちえっ、読むの下手なの」とかなんとか言っている。

「のぶみつ君、そこで見えるかなあ」と言いながら、彼の批判には笑って答えてすすめていった。

さて「もつと読んで」と言われたので「シナの五にんきょうだいを」を読んだ。四歳になっているとはいへ、三歳児クラスでは、三月になってもまだ無理だった。途中から特に、文をそのまま読むのをやめ、はしょって、要点だけ言ったのであるが、「さいばん」を「いいことか悪いことか、みなで相談すること」という風に、言葉も代えて言わねばわからないと言った。そしてアクビする子もいた。また、五にんきょうだいがそれぞれ特徴を持っている、死刑をまぬがれるというおもしろさが理解できてないようだった。

のぶみつ君については、保母さんは「外で遊ぶのは好きだけど、集中力のない子で」とまゆを寄せた。私は単純にかわいいと思っていたが、生活全般をみる保母さんには全く違った評価が生まれるのだなあと思省した。

さて、三歳児クラスでは「シナの五にんきょうだいはあまり大きな反応がなかったので、それでは、今日受け持ちの先生がお休みの、四歳児組で読んでみたら……ということになった。

四歳児組の保育室に入ると、五歳児担当の増田主任が、子どもたちをブロックで遊ばせていた。子どもたちはみな一生懸命に遊

んでいるようにみえたので遠慮すると、「じゃあ、そこにウロチヨロしている子たちに読んでみたら」とアドバイスしてくれた。なる程、落ちついてよくみると、二、三人、女の子が手ブラだ。そこでその子たちに読んでやろうとすると、三歳児組で一番前にいて、しきりに反応を示していた男の子がまた来て横で聞いていた。四歳児組の女の子たちはおとなしかった。だから、反応は三歳児組と「違うでしょう」と言われても、はっきり答えられなかった。やっぱり五にんきょうだいの特徴と、裁判のとり合わせの面白さは、さして感じてないようだった。

「どんな話？」と「シナの五にんきょうだいのあらすじをきいた主任さんは、私を五歳児組へ誘ってくれた。「今、本読んでるよおー」なんて答えている男の子もいたが、何か主任さんがおっしゃると、みんな粘土遊びをやめ集まってくれた。(下駄箱の中にくつがきちっと並んでいたクラスである。)集まると言うとき、何とさちっと二列に並んだのである。「さあ、もつとここ三人位になって前の方へ」と促すと、「三列！」なんて男の子が叫んでいた。

さあ、ここでは反応は大あり……………。

「ええ！首が鉄でできてる？ ロボットみたい。ええ！海の水を全部飲む？ あんな塩辛いのを？(全部飲むというお

かしきは指摘しなかった。ええ／＼全然燃えない？ そんなことつてある？ ええ／＼ 足がのびる？ ……など。

そこで私は、このクラスでは話ははしらず、文をそのまま読んでやる方がよいと感じて、くわしく読んでやった。子どもたちは原文の文学的表現を楽しんでいるようだった。念のため、一、二か所ことばの意味をたずねてみたが、意味もよく知っていた。そして、裁判ときょうだいたちの特徴のかけ合いの面白さも理解しているようにみえた。

三歳児組では、集中すること自体困難であったのが、この五歳児組では、何の苦もなくよく聞いてくれた。終ったら拍手もしてくれた。つまり、これは年齢のせいか、担任の保育も影響しているのか、場数の少ない今の私ではわからない。が、五歳児とはいっても「へえー、ぼくシナに行ってみたいなあ。首が鉄だったり、あんなに塩辛い海の水を飲んだりする人がいるところに行ってみたいなあ」とまだ実念論の世界にいて無邪気だった。

その、こうじ君という最前列にいた本の好きな男の子が、この絵本を貸してくれといって、自分で読み始めた。すると別の男の子が園にあるふ厚い物語を持ってきて、よんでくれといった。こうじ君は、「いいよ、そこで読んで。ぼく小さな声で読むから」と優しくいった。しばらく読んで五時すぎ、こうじ君が読み終って

返してくれたところで、読んでほしいといった男の子も「ぼくもいいよ」と言ってくれたので帰ることにした。

「反応はどうでしたか？」と保育さんにきかれ、「はい、よくきいてくれました。こうじ君は貸してくれといって、自分で読んで読んで」と答えると、「こうじ君は本読むの好きだから。でも少し、だらしがないですよ」とまたまゆを寄せた。

私の好きな子は、どうして担任の先生には嫌われるのかな？（担任の先生に嫌われている子が、私に救いをもとめて甘えてくるのかな？ でも、ただ甘えてくるから……だけではない優しさ、かわいさがあるのは？）

三月二十日(木) 午後から雨

二時頃から雨になった。「絵本を読んであげられる／＼」私は上司に許可をもらうと、保育園へとんで行った。今日は、「これを読んでやろう」と胸ふくらませて…。保育園は保育さんたちが、せわしげに机を運んでいた。なじみの保育さんが、「今日は卒園式の準備で」と叫んでくれた。「アー、五歳児組の、あの本が大好きなこうじ君にインタビュースることもできなくなった」私は、がっかりした。

四月八日(火) 雨

仲良しの三歳児組は四歳児になった。

雨ノ 朝から雨。今日は子どもたちに絵本を読んであげられると心はずむ。学校でちょっと仕事ができただけ、許可をもらって保育園へ行く。激しい雨だった。

もと三歳児組の仲良しになった保母さんの顔がガラス戸越しに笑う。ガラリーと出てきて下さる。「今日も絵本持ってきました」と言う。「じゃあ、お帰り、今すませちゃうからね」とのこと。外でとしふみ君がすねている。「すねちゃったから(?) 入れないように鍵かけといたの」とのこと。外で遊ぶ時は、のぶみつ君と並んで、私によくなく子だった。それが担任の保母さんにならずねるといたずらっ子で、「一番ノ、双壁ノ」とのことだった。子どもを前にして平気で悪い子という母親がいたりするけれど、子どもにも愛情こめて、「一番ノ」と笑う保母さんだった。

さて、また、保母さんが毛布を持ってきて下さった。先生用の高い椅子に座って、参考書にあったように膝の上に絵本を固定して、読み始めた私に、「見えない! もっと、高くして!」「高くして!」と声がとぶ。私の頭位に高くするとやっといという。五人位ずつ三列で十五人位の集団なのに両端が見えないという。今思うと、もう少し、最前列の子より下がって、一番前の子との

間をあげれば良かったのかとも思う。そうすると最前列の子が、あんなに首を曲げることもなかったのだ、失敗ノ 失敗ノ

絵本は、「ぐりとぐら」二回読まされる。一人二人の女の子の「もっと読んで」の声に誘われて、二冊、二回ずつ、計四回読み終わった頃には、おとなしく座っているのは二、三人だった。毛布の上であばれ始めた男の子たちは、もう部屋中を駆けめぐっている。「八分に声をおさえて」なんて参考書に書いてあったことは駄目、騒音の中で聞いている女の子たちに聞えるようにと声を高くとした。

さて、絵本が終った四時頃から、ブロックで子どもたちと遊んだ。「かうちゃん」と自分のことをいう女の子が抱きついてくる。「抱いてもいいんですか?」と保母さんにたずねると、「いいですよ、好きなように」とのこと。抱いていたが、時々、他の子が「赤ちゃんみたい」という。でも抱かれて、「あったかい」という。あまり抱いていたので疲れた私は思わず「かうちゃん、赤組(三歳児)みたい」と言ってしまう。反省する。保母さんの前で恥しいと思った。

また、今日、外に立たされたとしふみ君が、どうも荒れている。この前の絵本の時はおとなしく、となりの組までついてきて二度もきいたのに、あばれている。ブロック遊びでも、女の子

のをこわしたり、私をけったりする。そこで少し肩車したりして遊んであげた。すると(自画自賛か)ちょっと荒れたのがなおったようだった。

保母さんは、かうちゃんに、かうちゃん今日、久しぶりに甘えられて良かったねえと言った。おやノ、しばらくしてみると、かうちゃんは指をしゃぶっていて、チラリと、タコができているのが見えた。「アラノ、ちょっとみせて」と言うのと、くすくす笑って、手をかくす。でも見せてもらおうと、ほんとに関節のところにもタコができています。

かうちゃんは、五時半まで一人残る。ママは先生だという。黒板にお姫様と王様の絵をかく。頭足人間なのだが、顔はともくわしくまとまってかいている。ふさふさした髪に冠をかぶっている。保母さんは、「かうちゃんは、しっかりした線の絵をかく」という。でも左手でかくという。「かうちゃん、お手々違うよ、」と保母さんに声をかけられふり向いて、笑って、右手にチョークを持つ。

五月十六日 雨

今日は、「絵本の絵を、子どもたちが、ますながめる時間を与えてから、文を読み始めるよう気をつけよう」と心して出かけた。

た。

もう一つ、縦型の本は、体の横に持って、横長型の本は、膝の上において上から字を読むといいようだ。

また、ページをめくるのは、横より、上か下の角が良いようだ。

あまり声色を使っておもしろげに読むと、絵より声色の方に注意が向くようだ。(しかし、最近の子どもはオーバーに読まない)と集中しない……と主任さんは話して下さったが。

昼近く、空が明るくなって雨が上った。自由遊びの時をみはからって、園に電話をする。

「雨があがれば下はぬかるんでも、外で遊ぶのでしょうね」

「はい。できるだけ外で遊ばせたいものです。また、雨の時、お願いします」と、アッサリ断られてしまった。残念でした。

しかし、夕方、また降ってきた。私は喜びいさんで園へ出かけた。するとまた、着く頃雨があがってしまった。笑う私に、仲良しの保母さんは「工事中でうるさいもんで、外で読んでやるならいいですよ」という許可、ほんとに細い霧雨の中で、私は平均台に腰かけて、集まった園児たちをしゃがませる。

初めに「かばくん」を出す。「みんな動物園でかばみたことある?」なんて質問に「ハイ」と答える。やっぱり四歳児になっ

ても、いろいろ興味を誘う言葉が必要のようだ。

「ぎつねとねずみ」は、「ねずみノ 穴ほるの？」なんて疑問がとんだ。

前の方に立つ子がいて、「見えない」「見えない」とケンカする子も出、泣く子まで出る始末。でもそういう中でも大部分は聞いてくれた。

短かいお話の二冊だが、「もうおしまい」というと、いたずらっ子のとしふみ君が、スーとひざの上のつてくる。しばらくなすがまま抱いていると、やがて友だちに誘われて遊びに立つて行った。

お話が終った頃、集まっていた子の顔を見ると、知恵おくれのA子ちゃんが嬉しそうにしていた。

五月二十二日(木) 晴

先日、外で読ませてもらったので、これからは、晴雨にかかわらず読む機会があると思ひ出かけた。

門を入ると、四歳児組のいつもの子どもたちが、「来たー、来たー、来ましたよ」「おばちゃんあん」「おばちゃんだって？」とにぎやかなこと。「お帰りしてからね、待ってるから」と言うとうちに入る。

お帰りが終ると、走ってきた。きた。園庭の隅の平均台の後ろで、「どろんこハリ」を読む。しばらくすると、最年長組の子などが二、三人、前に来て立つ。すると「見えない」「見えない」と例によってにぎやかになり、私が立つ子を座らせていると、おや、まあ、真中で座っていた子どもたちは、泥あそびを始めた。こりゃあ、立つ子なんて、子ども同志にまかせという、私は読まなくちゃあと次を読む。すると声を聞いて、泥んこ遊びの連中も、絵本を聞き始めた。

読み終ると、あの乱暴ナンバー・ワンといわれたとしふみ君が、にやと笑って、私の手から絵本をとる。「いいよ、あとで返してね」と言ったものの、なぜ取ったかわからなかったが、彼はその場で、自分の膝の上に絵本をおいて、一ページずつめくっては絵をながめていた。そして、おわりまで見ると、「はい」と返してくれた。

としふみ君は、「また雨の時来てね」と言う。「雨が降っても、お話し合ひがある時は来れないの」というと、「あしたも来て」という。「毎日来れないの」というと、「じゃあ、あしたの次の日来て」と言う。「あしたの次の次の次の次しか来れないの」というと、ちょっとがっかりした顔をして、「肩車して！」とのぼってきた。女の子のかうちゃんも前からしがみつくと、「順番、

順番！」と言うと、思いがけなくみな納得した。小さい時から保育園にきてるから、もう四歳児組の五月で、順番を守ることができさる。(それとも、当然かな?)

としふみちゃんを何回か(園庭の端から端までが一回、約四十メートル位)肩車して、かうちゃんもおんぶして、ひろ子ちゃんもおんぶして、名前のわからない女の子二人位もおんぶした。例によって、としふみちゃんはしばらく甘えると、また他の子との遊びへ出かけていく。

「ひとつ、ふたつ、と数えて、とおまで」と言うと、かうちゃんもサッサとおりる。さんざん四、五人の女の子を順におんぶして、新顔がまた来たら、何と甘えんぼのかうちゃんが、「いいよ、私、もうたくさんおんぶしてもらったもの」と遊びに行く。

満たされると満足するとは、このことだなぁと思っていると、ひろ子ちゃんのパパが、お迎えに来た。かうちゃんは、いつも五時半のお迎えだ。うらやましいのか、淋しさが湧いてきたのか、かうちゃんはまた甘えんぼのかうちゃんにもどって、「おんぶ」と言ってきた。かうちゃんと遊動ブランコに乗る。二人で揺れていると、保育さんが、「いいわね」と言って通りすぎる。年長組の女の子が一人「乗せて！」とくる。同時に知恵おくれのA子ちゃんが来たので、「いらっしやい」と言うと、かうちゃんも年長組の

女の子も席を空けてのせる。別に、子どもたちに偏見は生まれていないようだ。

やがて、またお友だちにはお迎えが来て、かうちゃんは甘えだす。「甘えん坊さん！」と、私呼びかけると、「おぼちゃん、もう、帰れ！」と言う。「ハハハ。あんな意地悪言ってる」と相手にしないで、(一瞬、帰ろうかと思つたが、こんなキッカケで帰ると、なめられると思ひなおした。)かうちゃんに背中を向けると、すつとおぶわれた。「ジャングルジムへ行こう」と言う。閑散としてきた園庭で、一人ジャングルジムにのぼって、見ている私に、いろいろ言う。しばらくして(五時頃)「おぼちゃん、帰ろうかな」と言うと、「帰る？」と素直にきいてついでくる。むこうで庭掃除していた保育さんたちが、早くも気づき、「かうちゃん、園服着て、すみれさんで待ってな」と呼ぶのに反対方向に走り出す。なんと木陰においた私のかばんを取ってくれたのである。

保育さんたちは、口々に「ありがとうございました」と言ってくれる。私は「いいえ、どうも」などと言いながら帰る。私こそ、勉強させてもらったのだ。そして感じたのだ。母性が尊いと同じように保育の仕事は、大変な仕事だということを。

(静岡県立厚生保育専門学院)